

透谷・漱石と私

Ozawa, Katsumi / 小澤, 勝美

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学多摩論集 / 法政大学多摩論集

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

15

(終了ページ / End Page)

27

(発行年 / Year)

2004-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003174>

最終講義

透谷・漱石と私

小澤 勝美

はじめに

一九七六（昭和五十二）年に法政大学に専任講師として着任して以来、あつという間に二十七年間が過ぎてしまった。それ以前の高校教師の期間を含めると、四十四年間の教師生活を送ったことになる。都立の工業高校の機械科に籍を置きながら、国語の先生になりたいと考えていた自分が、このような形で定年退職を迎えることができるとは、全く夢のようである。私を法政大学に迎えて下さった方々に、心から御礼申し上げたいと思う。

さて、法政大学では、様々な科目を担当したが、やはり専門は日本文学で、透谷と漱石がその中心であった。私は元々正岡子規が好きで、一方、卒論は有島武郎であったが、その後、透谷と漱石にだんだん傾倒して行き、授業や講演で取り上げるテーマも、この二人が圧倒的に多い。私の書いた本も、『透谷と秋山国三郎』、『文学―透谷と漱石を中心に―』、『北村透谷―原像と水脈―』、『透谷と漱石―自由と民権の文学―』、『透谷・漱石・独立の精神』、『小田原と北村透谷』と並べてみれば、透谷と漱石がその中心であることは明らかである。

そこで、学問的な内容は、著書を参照していただくことにして、本稿においては、透谷・漱石と私との関わりを、エッセイ風に述べて最終講義に代えさせていただく。

透谷・漱石との出会い

私が漱石の名前を知ったのは小学生の頃だった。昔は、どの家にも「吾輩は猫である」や「坊っちゃん」位は必ず置いてあり、私はどういふきっかけか未だに分からないのだが、小学校の高学年の時「道草」を読んで何か得体の知れない感動を覚えたことを記憶している。一方透谷の方は、高校時代の受験参考書の中でお目にかかった筈だが、自覚的に向き合ったのは、当時三鷹に住んでおられた伊豆利彦氏の自宅で行われていた日本の近代文学史の研究会（私たちは三鷹ゼミと呼んでいた）で、猪野謙二氏の『近代日本の文学』という小さな本がテキストとして用いられ、その中で伊豆さんが熱っぽく透谷に言及された時だった。

私は高校三年生の時、アルバイトの無理がたたって病氣のために二年間休学し、受験にも失敗して一年浪人をしてから学芸大学に入学したのであるが、当時横浜市立大学の先生であった伊豆さんが、何故私たちの面倒をみて下さったかという点、私の属していた近代文学研究部というサークルの部長が平湯文夫君といつて、彼が都立西高時代、当時は高校の先生をされていた荒木繁先生（現・和光大学名誉教授）が担任であったため、同じ日本文学協会の研究者仲間の伊豆利彦氏をチューターとして推薦して下さったのである。

当時はおつて日本文学論の主導的な立場にあった日本文学協会の熱気はすでになかった筈だが、伊豆さんの人柄にもよるのだろうか、他大学の学生を毎週土曜日に自宅に集めて文学研究ゼミを開くという、今日では考えられないようなことが行われていたのであった。毎週一回のゼミで取り上げる本を手に入れるため、金のない私たちは一円でも安い本を探しに神田の古本屋街を足を棒にして探し回った。当時教養課程のキャンパスは武蔵小金井にあり、三鷹は近かったが、本を手に入れることとそれを読み切ることはのろまな私には大変なことだった。

私の挫折体験

今、その頃、北村透谷について書かれた伊豆さんの文章は、正確には思い出せないが、その背後にある重い何かは、五十年近く経った今日でも私の胸の奥に鳴り響いている。今にして思えば、透谷のことばは、伊豆さんにとって単なる抽象的な観念のことばではなく、触れれば血の吹き出る痛みをとまなうものだったに違いない。

吾人は記憶す、人間は戦ふ為に生まれたるを。戦ふは戦ふ為に戦ふにあらずして戦ふべきものがあるが故に戦ふものなるを。戦ふに剣を以てするあり、筆を以てするあり、戦ふ時は必らず敵を認めて戦ふなり、筆を以てすると剣を以てすると戦ふに於ては相異なるところなし、然れども敵とするものゝ種類によって戦ふものゝ戦を異にするは其當なり。戦ふものゝ戦の異なることによって勝利の趣も亦た異ならざるを得ず。戦士陣に臨みて敵に勝ち凱歌を唱へて家に帰る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ、事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし、然れども高大なる戦士は斯の如く、勝利を携へて帰らざることあるなり、彼の一生は勝利を目的として戦はず、別に大に企図するところあり、空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなして、戦争の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。（「人生に相渉るとは何の謂ぞ」）

まだ若かった島崎藤村が『女学雑誌』の「厭世詩家と女性」を読んだ時、電気に触れたような身震いを覚えたというが、私もまた、この「人生に相渉るとは何の謂ぞ」という文章に触れて魂を揺さぶられたのであった。これは明治二十六年、山路愛山との所謂「人生相渉論争」の中で書かれた文章であるが、世界史に後れて登場した日本が、やがて列強帝国主義の仲間入りをしてアジアへ進出する体制を整え、かつては平民主義、平和主義を唱えて相対的には進歩的な役割を果たして来た「国民之友」の徳富蘇峰がその体制に乗って大きく舵を切ろうとしている時、その先陣を切つて時勢に役立つ「事業としての文学」を強調し、透谷たちの「空の空なる事業としての文学」を批判したことに對する透谷の反論の文章であった。

しかし、透谷のことばが、もつと根底から私の魂の中に入り込んだのは、一九五六年（昭和三十一年）の暮頃から翌年の二月にかけて、私の生涯において最も大きな挫折を経験してからである。すなわち、当時私が属していた反戦学生同盟（A・G）で緊迫した中東情勢の中、学友の支部長からアラブ方面への自衛隊の出動を阻止するための武装蜂起方針が提起され、その具体的なプログラムを問う私の質問に「それは機密事項である。この件を他に漏らした者は直ちに銃殺する」と言われ、さらに遺書を書くようにも言われて、私は恐怖に打ち震えながら眠れぬ夜を過ごし、自分が平和のため〈労働者階級〉のために命を捧げるということは、〈私〉という実存にとつてどういう意味を持つのか、考えれば考える程堂々巡りに陥って、その方針に賛成も反対も出来ぬまま、時を過ごしたのであった。

後になって連合赤軍事件や浅間山荘事件が起きた時、それは他人事とは思えず、正義という名の狂気に取り付かれている。勿論、時代も状況も全く異なるが、透谷が大阪事件で大矢正夫の加盟への誘いを断って、自由民権運動から離脱した時の苦悩が、自分の体験と重ね合わされ、私は益々透谷の世界にのめり込んで行つたのであった。今から考えると滑稽な独り相撲のようにも思えるが、地上の党派的な政治と「文学」との関係について、私なりの思想を持つことが出来たのは、この体験と透谷の文学を繰り返し読み直すことを通じてであった。

もう一つ、透谷と並んで、私の挫折体験とそれに伴う虚無的な心情から私を救い出してくれたものに、埴谷雄高の「死霊」がある。私はもともと文学好きで、高校時代に正岡子規に傾倒し、「歌よみに与ふる書」から「墨汁一滴」「病床六尺」「仰臥漫録」と次々に読みふけて、自分でも俳句を作るようになり、ホトトギス系の『雪解』（皆吉爽雨主宰）に入会した位で、一方同時に、トルストイの『復活』に深く感動するあまり一週間位熱を出して夢遊病者のようになった経験もある位、文学に対してナイーブであったが、先に述べた挫折体験の後は、何を読んでも私の心は硬いゴムのようになってしまつて、しまいには街中ですれ違う人間が、無方向に浮遊する透明な何かとなり、人間と

しての存在を感じられないのであった。その時偶然、神田のゾッキ本屋に山積みされていた近代生活社版の『死霊』（第四章まで）と出会ったのである。その夜、難解な文章を読み進んで行くうちに、いつの間にか作中人物の三輪与志や黒川健吉らのように、孤独な極限の世界にあって、なおかつ人間性を失わずに生きている人々や、その黒川に食事を運んでやる鍔掛屋の李のような理屈拔きの民衆的な優しさにふれて、私の臉からは涙があふれて止まらないのであった。

この『死霊』という作品は、極度の抽象と観念性という限界を持ちながらも、日本の近代化の歴史の中で出現してしまった巨大なデーモンともいうべき天皇制に押しひしがれ、癒しがたい傷を負った人々の自己回復への希求、そしてその尽きることのない挫折の物語である。『死霊』ということばを分析すれば、『死』とは、歪んだまま停止した過去、すなわち死屍累々たる非連続のつまずきとその償い難さを表しており、それに対する「自同律の不快」という永久革命的な観点からの絶対批判をも同時に示している。そして一方、『霊』ということばは、「自同律の不快」を自己のアイデンティティとして持続する人間の〈自由〉への希求を象徴する、いわば透谷の〈内部生命〉の如きものといつてよい。

漱石との新たな出会い

話がわき道に逸れてしまったが、私は透谷の挫折体験を自らの挫折体験と重ねることであろうじて生き延びることが出来たといつてよい。反戦学生同盟は社会主義学生同盟（社学同）に改組されたが、私は実質的に離脱状態で、しかし透谷と同じように他の分野で戦おうと決意し、新しく大学の文化サークルの常任委員として、今までの政治活動とは異なった分野で活動を始めた。いまでも思い出すのは、大学四年の五月の開学祭に、当時はまだそれほど有名ではなかった吉本隆明氏に「現代文学運動の停滞からの脱出」という講演をもらったことである。夜遅く田端のア

パートを訪ねて、その趣旨を話すと、狭い部屋に赤ん坊（後の吉本バナナ？）がふとんの上に寝かされていて、吉本氏は私たちが近所の喫茶店に連れて行かれた。小田急線の喜多見に平野謙を尋ね、石川達三の「人間の壁」の講演を引き受けて貰ったこともある。また大阪学芸大学で行われた全国教育学生ゼミナールにも積極的に参加して他大学の学友と交流を深めた。そして翌一九五九年に卒業と同時に高校の国語科の教師となつて、教育実践、文学研究、組合活動の三本柱を中心に、体制内に身を置きつつ日本の改革に取り組んで行く方針を貫いて来たと言つてよい。

そして、私が数年前から参加していた日本文学協会近代部会は、伊豆利彦氏を中心に駒尺喜美、清水茂、西垣勤、相原和邦といった錚々たるメンバーがそこに参加していたが、昭和四十二年十月から、夏目漱石を二年間系統的に勉強して行くことになり、昭和四十五年十二月十六日には本郷学士会館で「夢十夜」の公開シンポジウムが行われて、伊豆利彦、駒尺喜美、平岡敏夫、以上三氏の報告討論に、越智治雄、内田道雄氏らも加わり、これらの三年近い研究活動は、私と漱石との出会いに新たな転機を切り開く決定的な出来事であつた。

私は近代部会に常時出席するようになるまでの間、新日本文学会の文学学校研究科に入つて、藤田省三、花田清輝、安部公房、椎名麟三らの講義を受け、また黒井千次氏の指導を受けて小説を書いたり、日本文学協会国語教育部会の合宿研究会で実践報告をしたりしていたが、やがて、新しく住むことになった八王子で、多摩文化研究会の沼謙吉氏や東京経済大学の透谷研究者色川大吉氏と交流するようになった。ここで私の透谷研究は、実証的な面で新しい段階を迎え、いわゆる《幻境》の主である秋山国三郎という存在が私の内部で次第に重みを加えていった。時代状況の変化もあって「変革志向を内在させながらも、大地に足をつけて日常性を生きた人間像」として秋山国三郎は、私の中に大きな位置を占めるようになった。

そして、一方、自由民権運動を研究して行く中で、透谷より一年早く生まれた同時代人としての漱石が、私の内部で透谷と比較されるようになり、今まで思いもよらなかった二人の共通点が見えてきて、運動に直接参加した透谷だ

けではなく、時代思潮としての自由民権運動の地下水に触れた若き日の夏目漱石が私の中にだんだんとその鮮明な姿を現して来たのである。

ところで、今年の九月に、岩波書店が創業九十年を記念して「読者が選んだ私の好きな岩波文庫100」を発表したが、読者からの投票約三万通の内、一・二位を占めたのが夏目漱石の「こころ」と「坊っちゃん」であった。これは、本来なら当然ともいえるが、近頃の読書界の風潮からいえば、一種の驚きでもあった。というのは、最近の教科書から漱石・鴎外の名が消えつつあると言われていたからである。しかし今度の百選における古典としての評価を得ている漱石について、図書館や本屋の店頭に並んでいる研究書を眺めてみると、膨大な研究が蓄積されているにもかかわらず、その多くは漱石の作品研究が中心で、作家以前の漱石の思想形成過程を追究する研究があまりにも少ないというのが私の印象である。

すなわち、漱石が『吾輩は猫である』を明治三十八年一月に『ホトトギス』に発表して以来、「倫敦塔」「カーライル博物館」「幻影の盾」と矢継ぎ早に作品を発表し、「草枕」「二百十日」「野分」につづいて、朝日入社以降は「虞美人草」から「こころ」をへて「道草」「明暗」にいたる超一級の作品を残したのであるが、そのため、それらの作品の一つ一つを論じて行けば、それは膨大な量となつて、それだけで漱石研究が成り立つかの如き錯覚を生んだといえる。

青年漱石の日本の近代への批判

漱石は透谷より満一年と十八日早く生まれている。そのことを思えば、漱石の作家以前の三十八年間の思想的な発展過程は、透谷と比較してどう捉えたらよいのであろうか。この三十八年間に、漱石の思想上の空白としてそのまま放置して良いのだろうか。それは、あまりにも怠慢ではなからうか。その一例として、明治二十五年、漱石が「文壇

に於ける平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』Walt Whitmanの詩について」を書いた時、「幸に『ダウデ』の論文を覧ることを得て稿を草するの際裨益をうけたること多し」と特記しているにもかかわらず、一九九四年に私がその全文訳を行う迄、何人かの英文学者によって部分的に訳されたのみで放置されてきたという事実がある。ということは、多くの漱石研究者が、漱石にとって明治二十五年の持っている特別の意義が理解されておらず、それは漱石と自由民権運動との関係が不問に付されていたことと重なっている。

また、それより以前、明治二十二年に、第一高等中学において校長木下広次の下で国家主義学生団体への入会を誘われて、親友の正岡子規と共に入会を拒否し、時勢に背く意味をこめて「漱石」と号したことに現れている漱石の反骨精神が、一体いつ何処で形成されたのであるのか考えようとしないうちにも重なっている。

それら一連の漱石の思想の軌跡の秘密を解く鍵の一つは、明治十八年から十九年にかけて大学予備門予科三級に在学していた時に漢文で書いた「観菊花偶記」という作文で、それを分析することによって当時の漱石の思想がかなり明らかになると私は考える。

この漢文の文章は、表題に「観菊花偶記 三級二組 塩原金之助拝」と書かれていて、東京大学予備門予科在学中のものであることははっきりしているが、何月に書かれたかは明らかではない。「都下有養菊者至秋造菊花」というように全文が句読点も返り点もない漢文なので、なるべく原文にそって意識しながら六つの段落に分けて分析したい。1 都下に菊を養う者がいた。秋になると菊花を造り、其の門に立札を立てて客を招いた。自分は嘗て往って観たことがある。その美しい黒髪、緑色の黛、豊頬皓齒、さながら一美姫であった。そして衣服や帯は皆菊で出来ており、姿態美しく綺麗な服を着ているのは一見して貴公子と知れた。そして裾や袖はみな菊であった。竹を編んでその体を造り花をこれに纏わせる。小さな菊の花も立派な枝もふつくらとして緑の葉はその隙間を補い、紅白粉や青い萼は光り輝いて見事に布置され、剪裁の妙至らざるところなしという 感じてであった。

2 ところが、ある客が来て、嘆いて言うことには、何とこの技の卑しむべきことよ。菊の枝の縦横曲直は、その生まれながらの性質に従って自然を全うするものであつて、これがよい場所に庭師が樹を養う所以である。思うに、隠逸閑雅にして野趣掬すべきところが菊の天性ではないのか。今この有様ではどうして菊といえようか。

3 それに対して、花を養う者がいうには、天下においてその性を曲げ、その天性を屈する者は独り菊だけであろうか。今士に於いて貴ぶ所のものは、節義氣操のみである。ところが利禄や爵位を眼にするとその操持する所を一刻も早く捨て去ろうとするのが、滔々たる天下の有様である。この輩は、金の冠や立派な刺繍をした服を身につけていても、その精神は亡んでしまっている。どうしてこの菊と異なるといえようか。

4 しかも菊の方は、肥料で栽培しなければ花は艶やかにならず、十分に水をやらなければ大輪とならない。また春苗を摘み取らないと枝は立派に分かれない。つまり灌漑や培養が良くないと菊を自分の思うように使うことが出来ない。

5 ところが、士に至っては其れとは異なつて、利禄に誘惑されなくても自らその性を曲げる者が居り、爵位で釣られなくても自らその天性を屈する者がいる。あきれた者ではないか。かの士なる者は、世の中の人々が敬い手本として尊敬する者である。それなのに今このような有様である。どうしてこの菊人形の技だけをけしからんというのか。

6 客は、これに対して、遂に答えることが出来なかつた。

右の文章は、1において菊人形の外形上の美しさを描写し、2にいたつて一人の客を登場させて菊人形が、菊の「自然」や「天」を損なう様を批判した後、3、4、5、に於いて菊造りが、その客の論理を逆手にとつて当時の時代状況に話の内容を転換し、客を徹底的に批判することで、6において客の沈黙をつくりだしている。この対立する視点同士の対話形式による文明批判は、中江兆民の「三酔人経綸問答」（明治二十年）より二年前に書かれたことに

注目すべきで、漱石のオリジナルな発想を持った政治小説といつてよい。

ところでこの「観菊花偶記」のキーワードは「天」であるが、この「天」については、すでに「夏目漱石における「天」の思想 序」(透谷と漱石—自由と民権の文学—)において詳しく論じたことがあるので、長々と繰り返すことはしない。しかし、柳父章が「近代思想史における『天』と“nature”」において述べているように、「天」という言葉が大きな役割を果たしたのは、一つは、幕末から明治初期、つまり明治維新の時期と、もう一つは、明治十年代の「天賦人權」が唱えられた時期であつて、「時代を支配する権力や価値が根底的に批判される根拠として、そしてあたらしい価値がまさしくそこからみちびかれるような根拠として、人々は「天」を求めた」と柳父はいふ。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と述べた福沢諭吉についてここで改めて説明する必要はないだろう。

漱石の徴兵拒否とホイットマン論文

「観菊花偶記」の中心思想をなす「天」の思想が、ルソー的な「自然」や、後年の「則天去私」の「天」の思想とつながっており、菊人形の華麗な、しかし内側が空洞化している姿を寓喩的に用いて自由民権運動崩壊後の滔々たる転向の時代を諷刺したことは明らかである。したがって、明治十八・九年において漱石はすでに日本の近代に対してかなり鋭い批判を行っていたことは明らかであつて、明治二十五年の悪名高い選挙大干渉事件の後、北海道に籍を送つて徴兵拒否をやり、同じ年に「文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』 Walt Whitman の詩について」や「中学改良策」の中で日本の近代化批判を行ったことも、一貫した思想的な立場に立つての行為であつたことは、現在の私は確信を以て言い切ることが出来る。

ところで、それにも関連して、「明治の精神」の体現者としての乃木さんの「殉死」をめぐって、かつて、丸谷才一氏と駒尺喜美氏との間で論争があつたが、丸谷氏は「徴兵忌避者としての夏目漱石」という論文(「展望」昭和四

十四年六月号)の中で、漱石の徴兵忌避が、「たぶん漠然と世間の通念に従っておこなわれたもので、別段、確固たる思想的立場に立っての行動というようなものでなかったらう」といい、その根拠として漱石が北海道へ籍を送った同じ年の、明治二十五年、大学へ提出する教育学の論文として書いた「中学改良策」の中の「国防も厳にせざれば城下の盟に末代の恥を遺す事あるべし」ということを引用している。しかし、実はこの語句は、その後に「去れば天下の人々狂奔喧走して彼も此もと輸入したる結果如何にと見てあれば先祖伝来の元氣漸く沮喪して見掛許りは驚山なる不具者となりぬ」という文脈に続いているのであって、このことを見落としたのは、丸谷才一氏の重大な誤読であることを、私はすでに「漱石における個人と国家」(『日本文学』)の中で指摘している。

つまり漱石は、明治二十五年段階で、日本の近代化が真の近代ではない、(ニセ近代)であることを明確に認識しており、それは、後に「マードック先生の『日本歴史』」(明治四十四)において次のように述べたことと真つ直ぐにつながっている。

われらはただ二つの眼を有っている。そうしてその二つの眼は二つながら、昼夜ともに前を望んでいる。そうして足の眼に及ばざるを恨みとして、焦慮に焦慮で、汗を流したり呼吸を切らしたりする。恐るべき神経衰弱はペストよりも劇しき病毒を社会に植付けつつある。夜番の為に正宗の名刀と南蛮鉄の具足を買うべく余儀なくせられたる家族は、沢庵の尻尾を嚙って日夜あくせくするにも拘わらず、夜番の方では頻りに刀と具足の不足を訴へてゐる。吾等は渾身の氣力を挙げて、吾等が過去を破壊しつつ、斃れる迄前進するのである。

これが「三四郎」の広田先生の「亡びるね」という言葉や、「現代日本の開化」における漱石の日本の近代化への悲観論と重なることは今更言うまでもない。「夜番」というのは、権力を持った「国家」を指し、「正宗の名刀と南蛮鉄の具足」というのが、大砲や軍艦といった「陸海軍の軍備」をさすことは明らかである。そして、日本は、その後漱石の指摘通り、戦争につぐ戦争を行ってついに破滅したのであるが、日本ばかりではなく、九月十一日のニュー

ヨークの同時多発テロ事件に始まる、アフガニスタンやイラクでの戦争を見れば、アメリカ・イギリスをはじめ、今日の軍事力優先の国家に対する批判として、漱石の百年以上も前の批評が、今なおリアルティを失っていないことが明らかであり、そこに、現在の私たちの不幸があるといえるだろう。

現代の危機と透谷・漱石

グローバルゼーションの名の下にアメリカ式の競争主義、効率主義が企業のみではなく小・中・高から大学までの教育現場にも浸透し、後れた者や弱い者、年取った者がどんどん切り捨てられる世の中になりつつあるのは、誰もが実感していることに違いない。また国際平和の問題に関しても、アメリカの横暴は目に余るものがある。私の長年の友人で、早稲田大学名誉教授の杉野要吉氏は、『わが「文学史」講義―近代・人間・自然―』（二〇〇三・九）の「あとがき」の中で、今度の一連の戦争を見る限り、「ビン・ラディンがアフガン自爆テロリスト集団のリーダーであるというなら、ブッシュこそ、他民族の国家や文明の破壊、無数の無辜の人間の殺戮を巨大な規模で一気にやってのける、まさにチョムスキーのいうとおり「世界最大のテロ国家」のリーダーだといってまったくさしつかえない。」と言いつつ切っている。そして、悲しいことに、そのブッシュ大統領にいち早く支持を表明したのが、日本の首相、小泉純一郎氏であった。しかし、イラク戦争はいまや、かつての日中戦争や、アメリカとベトナムとの戦争に似た泥沼状態に陥っていることは、誰の目にも明らかであり、にもかかわらず日本はイラクに自衛隊を派遣しようとしている。この世界の現実を、透谷や漱石が見たら何と言うだろうか。私は、そう言いつつも何も出来ない自分に苛立つのであるが、しかし「日本文学」の授業で学生に見せた内館牧子脚本の映画「坊っちゃん―人生損ばかりのあなたに捧ぐ―」の中で、漱石が、主人公の坊っちゃんに、「明日勝てなければ、明後日勝つ、明後日勝てなければ、勝つまで頑張る」と言わせたその言葉に多くの若者が共感しており、そこに漱石の「たまたかい」の精神が今なお生き続けている

ことを思わずにはいられない。

私は、『社会文学』第十六号（二〇〇一・十二）の中で、「私はつねづね漱石の『坊っちゃん』の原像が、内田魯庵訳のトルストイの『イワンの馬鹿』への共感からはじまって、『吾輩は猫である』の八木独仙の話の中に出てくる『馬鹿竹』のイメージとなり、その延長線上に『坊っちゃん』が誕生して、その主人公の坊っちゃんと清との間に存在する〈無償の愛〉が日本人の心の〈故郷〉として長く読み継がれてきたと考えている。」と書いた。

漱石は『イワンの馬鹿』が『西洋的にあらず寧ろ東洋的と存候。』（明治三十九・一・六、内田魯庵宛）といっているが、これは、内田義彦氏が『「日本」を考える』（二〇〇一・五）の中で、ルソーの『利己心』と『自愛心』とを区別して、後者の『自愛心』がカント以降のドイツ哲学になり、ロシア古典文学をへて『浮雲』以来の日本文学にも流れているのではないかという指摘を行っていることと併せて考えると、『坊っちゃん』の源流は、西洋でも東洋でもない人類の〈魂〉の『故郷』そのものにあつたといえる。ということとは、それは、つまるところ、透谷の『内部生命』や、漱石の『則天去私』という〈文学思想〉に、根本的なところで繋がっているともいえるだろう。

私は、退職後も、この透谷と漱石を中心にしながら、幅広く日本と世界の文学に取り組んで行きたいと思っているが、幸いなことに、かつて市ヶ谷キャンパスで、私と一緒に学生中心の透谷研究会を作った時のリーダーであり、現在も作家として活躍中の藤沢周氏が、私の後任として経済学部の『日本文学』を担当してくれることになったので、学生は、私とはまた違った透谷や漱石に接することが出来るのではないだろうか。